

令和 2 年 7 月 7 日現在

機関番号：58001

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02854

研究課題名(和文) 考古学との協業による、金石文資料の蒐集・分析に基づく琉球寺院原風景の復元的研究

研究課題名(英文) Ryukyu temple research in collaboration with archeology

研究代表者

下郡 剛 (Shimogori, Takeshi)

沖縄工業高等専門学校・総合科学科・准教授

研究者番号：50413886

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：金石文研究を通して、琉球王国の寺院の原風景の復元にせまった。王国時代の蓮華院跡から出土した一字一石経1314点を整理・研究し、康熙30(1691)年または31年に、蓮華院の僧侶不羈(別名脱心祖頼)が作成して埋納したものであるとした。また禅宗寺院において本尊の前に配列される三牌について研究し、琉球寺院の三牌の源流になった日本禅宗寺院のもので現存最古のものは、これまで位牌とされてきた徳島県指定文化財で、正しくは今上牌で、日本の今上牌は当初「今上皇帝」であったが、明治期に「今上天皇」へと変化してゆく。琉球王国では王国時代に「今上国王」への変化が看取できることから、琉球独自の変化であることがわかる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦争で大きな被害を受けた沖縄では、王国時代の文化財は特別に貴重なものである。一字一石経は戦中、土に埋まっていた故、戦争を生き延びることができた。その文化財の価値を発見し、公表できたことに意義がある。他方、三牌は、戦争で大きな被害を受け、沖縄本島ではわずかに2基が県立博物館に残されたにすぎない。2基とも大きく損壊しており、またこの研究開始までは、位牌とされてきたものである。わずかに残された文化財の本来の機能を明らかにし、その源流をさぐってゆくこと、さらには琉球での独自の変化を見いだした意義がある。今後、首里城とならんで円覚寺を復元してゆく際の、大きな指標となる発見と考える。

研究成果の概要(英文)：we arranged and studied 1314 Ichijiissekikyō. They were created by the Rengein temple monk Fuki. Created in 1691 or 1692. On the other hand, we also studied Sanpai. The oldest Sanpai is Tokushima Prefecture designated cultural properties. It used to be considered a Ihai. But, correctly, it is one of the Sanpai, Kinjohai. Japanese Kinjohai changed during the Meiji era. Ryukyu's Kinjohai changed in the Kingdom era before the Meiji era. Changes in Ryukyu were unique

研究分野：日本史

キーワード：一字一石経 三牌 石碑 不羈 脱心祖頼 当間親雲上重陳 臨濟宗 真言宗

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の対象たる琉球仏教史は研究が希薄な分野の一つといえる。前近代を対象にした、比較的近年のまとまった研究は、島尻勝太郎『近世沖縄の社会と宗教』（1980年、三一書房）、平敷令治『沖縄の祭祀と信仰』（1990年、第一書房）が挙げられるにすぎず、しかもそれらは、多様な信仰の一形態として、部分的に仏教を取り上げたにすぎない。琉球仏教を正面から取り上げた研究としては、知名定寛『琉球仏教史の研究』（2008年、榕樹書林）が唯一である。さらに、上述研究は、ごく近年の知名氏のものも含め、全て首里王府の編纂物に依拠してなされ、その結果として導き出された成果は、薩摩藩による宗教統制や、鎮護国家仏教としての意義など、あくまで外交・王権とリンクする範囲の中にある。申請者は、上述問題意識に基づき、平成19年度～22年度「近世琉球寺院の社会的機能の解明」、同23年度～26年度「沖縄県外史料の蒐集と分析に基づく近世琉球寺院の社会的機能の解明」にて、基盤研究(C)の助成を受け、文書・日記・沖縄県外史料を用いて、琉球僧侶データの蒐集と寺院の社会的機能の研究を進めた。

上述研究中、石垣島の桃林寺を訪れたところ、境内に18世紀半ば以降の僧侶の墓碑10基と1基の梵字碑を確認、そのほぼ全てが沖縄県・石垣市の調査で報告されていないことがわかった。近世の文献史料には、寺院境内に薩摩役人・僧侶の墓所が存在したことが記されるが、現在は桃林寺を除き、全く残っていない。そこで2014年、拓本採取を含めた詳細な調査を実施したところ、さらに本堂の中からは、臨済宗寺院で見られる三牌（本尊の前に安置される三つの牌、火徳牌・今上牌・檀那牌）を確認した。今上牌と火徳牌には1829年作成の銘が記されていたが、これらの牌もまた沖縄県・石垣市の文化財調査からは漏れていた。通常、今上牌は、皇帝又は天皇の聖寿を祈るものであるが、桃林寺のものは国王の聖寿を祈ったものであり、国内唯一の現存例と考えられた（拙著『近世琉球寺院の原風景を追う』）。そのため、近世琉球寺院の三牌について他の寺院の事例を調査したところ、沖縄県立博物館・美術館にて「位牌」として収蔵されていた資料が、戦災で焼失した首里円覚寺仏殿の火徳牌と檀那牌であったことを確認でき、仏殿内部の規模を知るための指標となる貴重資料として新聞報道された（「首里円覚寺の牌現存」『沖縄タイムス』平成26年10月15日朝刊社会面）。

桃林寺調査が本格化する前年、平成25年には、沖宮にて近世期の石碑4基を確認。下半部が土中に埋没していたため、琉球大学考古学研究室・那覇市文化財課・那覇市歴史博物館の協力をえて発掘調査を実施した。その結果、2基は戦後所在不明となっていたもので、残る2基は新発見の石碑であることがわかった。さらに石碑の土中埋没部分には、これら石碑が1660年に前後して、日本からの渡来僧によって建立された旨が記されていた。石碑作成の近世期、日本僧が琉球に渡来し布教活動を行っていたことは、文献史料には登場しない、全くの新しい知見であった（拙著『沖宮 順治十七年石碑』・拙著『沖宮 順治十七年石碑 - 研究編 - 』）。

平成25年12月には、旧天界寺井戸の脇にて1800年の冊封使趙文楷の石碑の一部が転がっているのを見つけた。また同公園内の弁財天堂前の手水鉢を覆っていた蔓を除去したところ、1855年に寄進された旨の刻字があることも見つけた（拙稿「首里城公園内金石文二題」）。ほかにも同月には、首里城近辺の民家の庭に、近世期のものと思われた手水鉢が置かれていたことから聞き取りを実施したところ、自宅の造成作業中に土中から見つかったこと、向かいの民家の造成工事の際には一字一石経が大量に出土し、そのまま埋め直したこと、自宅及び向かいの民家の出土物についての学術調査は実施されていないことを知る

ことができた。聞き取り調査を行った民家と向かいの家ともに近世寺院跡地にあたる。さらに、2014年7月の台風直後には、旧天界寺の跡地で蓮花が彫刻された石材が他の石材とともに積み重ねて放置されていることを確認、近辺の民家では台風対策として、近世の梵字碑が門を固定する石材として使用されていた。以上述べてきた近世期の文化財は全て、これまでの調査で把握されていないことも確認した。

戦災で多くの文化財を失った沖縄にあって、これらは特別に貴重なものであり、そのまま放置しておくべきものではない。散逸しないうちに、なるべく早く詳細な調査を実施し、保存の方法を考えなくてはならない。

沖宮石碑発掘調査を実施し、金石文に注意を払うようになってから僅か一年ほどの短期間に、これほど多くの金石文資料が発見されたことは、これら以外にも同様資料が数多く、文化財関係者に知られることなく放置されている可能性が高いことを示している。特に首里城周辺の寺院密集地跡の民家で次々と発見されたことは、沖縄県や那覇市の学術調査が民間地へは及んでいないことを示していると考えた。

『沖縄タイムス』平成26年10月16日朝刊社会面にて、戦災で失われた首里円覚寺三門の復元計画を沖縄県が進めている旨が報道された。近世仏教関係金石文資料を蒐集・分析し、寺院の原風景を復元することは、先の戦争で失われた沖縄の文化財の回復に直接的に寄与できるばかりでなく、琉球仏教寺院の社会的機能の解明について、一層の深化を期待できる研究になると考えた。

2. 研究の目的

考古学班を含む科研全体の調査として明らかにしようと計画している点は次の二点である。

まず前述した民間宅地庭に埋蔵される一字一石経の発掘。聞き取り調査の結果、庭のどこに埋蔵されているかという詳細な情報も得ており、発掘すれば確実に出土すると予想している。

次に天界寺跡の石材。石材に重量がある上、多数の大きな石材と積み重なって集積されているため、現時点では片面しか見えない。考古学班の学生・院生も加わり、重なり合う石材を一つひとつ除去し、土中埋没石材も含め、石材全体が何であるのか調査する。

文献史学班単独で明らかにしようとしている点は次のとおりである。

金石文資料の銘は一般的に文字情報が少ないため、作成の背景(作成者の宗派や法脈、作成理由など)を知るためには、同時に琉球僧侶の法脈や活動時期などの基礎データが必要になってくる。これまで、約800件の近世琉球僧侶データを集積した上、さらに18世紀半ばにいたる琉球国内臨濟宗全公寺の歴代住持を記した文献の存在を確認している。ただ同文献には、現時点で複数の類本があることも把握しているため、その異同について検討、書誌学的研究を行った上で、全文を研究期間内に翻刻・公刊する。

次に僧侶の法脈について。現時点で、私寺西来院について近世末期に至る法脈を記した、首里王府評定所文書の存在を確認している。加えて、私寺仙寿院・蓮華院・万松院では、歴代住持の位牌があることも把握している。これら三寺院の位牌は、近現代の作成ながら、その中の一寺院からの聞き取り調査では、「文書など全てを戦災で失ったが、墓中の骨壺の銘書をもとに前住が作成した」との証言もえた。既に集積済みの800件の僧侶データと対比することで、位牌の史料的价值を精査し、西来院を加えた四寺院の法脈を明らかにし、研究期間中に発表する。

3．研究の方法

発掘調査は考古学班を中心に行うが、文献史学班も調査に参加し、情報の収集に努める。発掘された遺物については、考古学班が調査してゆく。

文献史学班は東京大学史料編纂所所蔵史料を中心にデータ集積を行ってゆく。

研究統括者は、沖縄に在住していることから、文献史学班のデータ集積は、基本的には研究分担者に一任するが、長期休暇中には出張して、研究統括者がデータを自身で確認してゆく。また、考古学班の遺物調査には基本的に参加して、その後の研究計画をもとに、データ採取の方針決定や変更などを指示してゆく。

4．研究成果

研究計画との大きな齟齬は、首里城近辺の民家にて聞き取り調査を行った際の「庭の手水鉢は自宅の造成作業中に土中から見つかったこと、向かいの民家の造成工事の際には一字一石経が大量に出土し、そのまま埋め直したこと、自宅及び向かいの民家の出土物についての学術調査は実施されていないこと」とする点のうち、向かいの民家の一字一石経についての情報であった。那覇市文化財課と連携を取りながら調査準備を進めてゆくうちに、同所から発掘された一字一石経は、実際には、1990年の出土時に、民家造営業者から連絡を受けた那覇市が全て回収して、那覇市文化財課の倉庫に収容しているとのことが判明した。しかしながら、遺物調査は未実施であって、文字がある礫石と、文字がない礫石の分類作業も終わっていなかった。そこで、研究統括者を中心に、考古学班と共同で、分類作業からはじめ、収容していた全ての一字一石経の調査を終了した。ただし、一字一石経の発掘作業自体は行えなかったため、その代替として、他に遺物がないかを確認するための音波調査と、ポイントを絞っての試掘調査を実施したが、新しい遺物は発見できなかった。

また研究計画の齟齬とまではいえないものの、琉球僧侶の法脈については新出の知見を得た。極めて重要な史料と考えたが、公開については所蔵者の了承を得ることができなかったため、公開しない。西来院の法脈単独での論文発表も検討したが、位牌調査と併行して進めていった三牌について新知見が得られたため、三牌の方で論文発表した。

東京大学史料編纂所所蔵史料の文献調査では、本科学研究の出発点の一つとなった沖宮の近世期石碑の建立者が、自身の一生を振り返って記録した回顧録を発見した。これまでは、薩摩藩士某の作成とされていたその文献が、薩摩から琉球に渡った当間親雲上重陳の手によって成ったものであることがわかり、その記録を通して、1600年代初頭の薩摩と琉球との関係の一側面が把握できた。また沖宮石碑そのものについても記載がなされていたため、全体を翻刻して、成果を発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 下郡剛	4. 巻 125
2. 論文標題 琉球と日本における今上牌の変化 今上皇帝・今上天皇・今上国王の関係性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立正史学	6. 最初と最後の頁 83-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 下郡剛	4. 巻 125
2. 論文標題 琉球と日本における今上牌の変化 - 今上皇帝・今上天皇・今上国王の関係性 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立正史学	6. 最初と最後の頁 83 - 102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 下郡剛	4. 巻 1
2. 論文標題 大分市松岡山長興寺の三牌	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 日本史のまめまめしい知識	6. 最初と最後の頁 253-260
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 林讓	4. 巻 94
2. 論文標題 源頼朝袖判平盛時奉書（佐々木文書）について 正文と写の史料学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 駒沢史学	6. 最初と最後の頁 21 - 41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池田榮史	4. 巻 22
2. 論文標題 韓半島と琉球列島の交流・交易について：物質文化資料を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 海港都市文化交渉学	6. 最初と最後の頁 1 - 20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池田榮史	4. 巻 2
2. 論文標題 琉球列島史を掘り起こす - 11～14世紀の移住・交易と社会変容 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中世学研究	6. 最初と最後の頁 83 - 102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 下郡剛
2. 発表標題 ペリーがやってきた！ 事前に記されていた未来日記
3. 学会等名 日本古文書学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 下郡剛
2. 発表標題 琉球と日本の文化交流
3. 学会等名 日本アイルランド協会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 下郡剛	4. 発行年 2019年
2. 出版社 日本史史料研究会	5. 総ページ数 169
3. 書名 首里当蔵蓮華院跡出土一字一石経 - 球陽三詩僧不羈の事蹟 -	

1. 著者名 下郡剛	4. 発行年 2018年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 214
3. 書名 琉球王国那覇役人の日記 - 福地家日記史料群 -	

1. 著者名 下郡剛	4. 発行年 2020年
2. 出版社 日本史史料研究会	5. 総ページ数 121
3. 書名 沖宮天燈山の石碑と『伊地知大膳覚書』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	林 譲 (hayashi yuzuru) (00164971)	東京大学・史料編纂所・教授 (12601)	

